九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「慰安婦」言説再考 : 日本人「慰安婦」の被害者性をめぐって

木下, 直子

https://doi.org/10.15017/1398291

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

1990 年前後に出現した〈従軍慰安婦問題〉においては、「慰安婦」とされた日本人女性は「被害者」とみなされない傾向があった。本研究では、彼女たちがなぜ被害者に寄り添う視点を持つ人々からも見落とされる傾向にあったのかという問いを解明するために、〈従軍慰安婦問題〉をめぐる言説空間では、「慰安婦」制度を性暴力の観点から問題視する言説であっても、日本人「慰安婦」が貧困ゆえに身売りさせられたり騙されたりしたという背景を問わず、国家のために「慰安婦」になることに同意したとみなす視点を前景化させたという仮説を立てた。つまり、日本人「慰安婦」が「加害国の成員」として主体化されたという仮説である。

この仮説を検証する前提として、第 1 部では、〈従軍慰安婦問題〉がどのように社会問題として構築されていったかについて、日本人「慰安婦」の語られ方に注目しながら分析した。第 2 部では、性暴力を問題視する論理を持つ(1)1970 年代を中心としたフェミニズム運動の「慰安婦」言説、(2)1990-93 年の「慰安婦」問題解決運動の言説を対象に、日本人「慰安婦」がどのように表象されていたのか言説分析をおこなった。

分析の結果、(1)の「慰安婦」テクストには、「性抑圧を受ける存在」として「慰安婦」に自らを重ね合わせ、日本人も含む「慰安婦」総体を被害者と捉える視点の萌芽が確認された。しかし新左翼運動の反帝国主義の思想から、「慰安婦」は日本人に抑圧される他民族の女性として表象されがちであった。一方で(2)の運動は、諸外国の被害者の証言の重さを受け止め支援にあたったが、日本人「慰安婦」を被害者総体から外してしまう傾向がみられた。

第 3 部では第 2 部の結果をふまえ、日本人「慰安婦」の被害者性を後景化させた主要なメカニズムは、個人を均質的な「国民」とみなすナショナリズムの作用によるという結論を導き出すことができた。日本人が「お国のため」に「慰安婦」になることに同意したという語りを積極的に踏襲する動きはみられなかったが、対抗言説が紡がれる様子もなかった。彼女たちの被害者性を可視化するために、「国民」が国家暴力の被害を受けるという視点の徹底が必要であると論じ、結びとした。